

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十六年二月一日発行(毎月一回一日発行)
第十卷第十号(通巻第一一八号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第118号

2. 2004

PDF制作

俳誌のsalon

畝枕

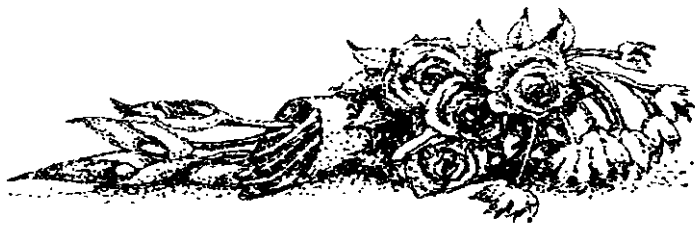
品川鈴子

地割り杭打つ師居あとの薄氷に

師居の芽木伐り分譲の杭を打つ

比翼句碑のみの師居あと地虫出づ

初場所に引退誓子も鼯肩筋



亡き者も居る初場所の砂被り

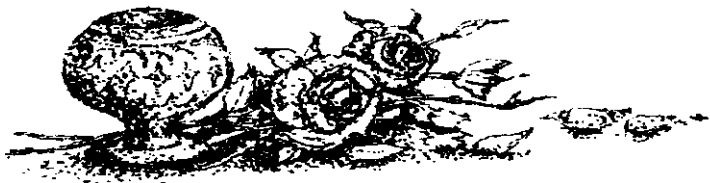
邸坂猪うろたへるクラクション

暮れなづむ美馬の郡こおりを野火走る

温む水鯉も細身と丸身あり

パソコンにとかく肩凝る翁草

不揃ひの蕪うねごろごろ畝まぐら枕



第八回ぐるっけ賞発表

受賞作品

連句の部

俳句の部

歌仙「アツシジ」の巻 文音 三吟

海彦・山彦

佐田 昭子

連衆

青海苔と石蓴の長さ較べけり

アツシジの聖画売る店冬茜

竹下 昭子

うららかや無人海洋観測所

もの知り顔に猫のくつまめ

木村 美猫

イシサンゴ化石となりし春の浜

こんりんざい膨らむポップコーンにて

森田 蓉子

磯嘆き有間皇子の無念とも

おきばりやすとささりひと言

昭

紀の国の海に没る日や梅を干す

月までも飛ばす勢い満塁打

美

湯垢離場へ熊野詣の白浴衣

海鳴りはるか芒穂を解く

蓉

山に磯に海に生きもの復活祭

(以下略)

捌 竹下 昭子

玉 鈴

兵庫 田中敏文

車両隅みやげの整理秋遍路
七五三祈禱の列は五〇〇番
晴着の子にて突っかけの七五三
懸崖菊の影に身を置き絵筆とる
エスカレーター階ごとにポインセチア

大阪 谷 泰子

橋の名のバス停続く紅葉谿
水引草杣に慶びごとありて
鳴神の窟に届かぬ秋日差し
杣が家に手入れ済みたる臥竜松
雲ヶ畑崖の高みに通草熟る

愛媛 筒井圭子朗

御神輿の舁夫に外人登録す
究極の紅葉奥社の弥宜と見る
短日の屋根よりペンキ缶降す
火気警しめて旅立つ冬遍路
急ぎ立てて終の一頭牧を出る

吟

兵庫 内藤三男

間抜き菜を急いで湯搔く夫の留守
黄落のグリーンに踏み芝目よむ
賜はりし端溪にくむ芋の露
届かざる竿の先みな木守柿
復刻の岩波文庫秋灯

大阪 中島 霞

吊橋を渡れば澄みて秋のこゑ
遠き灯は母のぬくもり暮の秋
潔し一葉残さず木守柿
立礼の茶を干す床几照紅葉
筥迫は母のおさがり七五三

大阪 中田征二

秋の旅難読駅の赤穂線
播州路越ゆ晩秋の備かな
秋寂し何もない所邑久の駅
花芒千町平野気宇壮大
蔦紅葉燃ゆる夢二の館かな

大阪 中田寿子

団栗をしんがりも蹴る通学路
残る虫テナー崩れか今日の声
ひよんの実の空洞音の善し悪し
トネルの先は粉殻焼く煙
熟柿吸うこの口もとを夫知らず

愛媛 永野秀峰

茶の花が平家屋敷を囲みたる
檀那寺子がゐて聖樹点滅す
ゆつくりと休めと刺せり針供養
振り分けてガードレールに大根干す
讃岐路のビニールハウス村をなす

高知 西村栲子

ふるさとの川に貫ひし茎の石
荃石を拾ひ一本橋渡る
娘に遠慮嫁に気兼ねの木の葉髪
大根漬け手馴れし妻の白髪かな
福寿草春はかならずやつて来る

兵庫 長谷川鮎

鶏の足跡雪の穂高宮
知恵の輪をくぐる足跡雪くぼみ
幕内に号令かかり追儼式
梅含む館の女六十路古希
猫の恋言いたきことを控え目に

東京 長谷川登美

源平の戦も昔春近し
地震までは吾庭で見し初紅葉
藤絡む吊橋渡り平家村
雪解水箒を流すも怖れし日
囀りの奥山にダム高速路

兵庫 花房敏

刈田径径譲り合ひ笑交す
散歩して案山子に逢へず戻り来る
若き主婦脚榻に立ちて松手入
草虱付けて彪犬戻り来る
溝川に穂芒戦ぐ美しき

薬草歳時記

(一一七) ロウバイ(蠟梅・臘梅)

市橋 章子

臘梅や雪うち透す枝のたけ

芥川龍之介

芥川龍之介はこのほかこの花を愛したそうで、歳時記にもいくつか俳句が載っています。ものの動く気配すら感じられないこの季節、冬枯れの庭に、時には雪に埋もれて、ロウバイの花が開き、なんともいえない清香を放つと、春遠からじとうれしい気分になって参ります。

ロウバイは中国原産、江戸時代初期に日本に渡来。ロウバイ科ロウバイ属の落葉低木。高さ二〜四m。幹は束生、分岐しています。

直径二cmほどの花が、葉に先立ってうつむき加減に開花。花びらは蠟細工のような色艶で、外側は淡黄色、内側は紫褐色、梅に似た香気を放ちます。

ロウバイにはいくつか変種があり、近年ではこの変種が本種より珍重されています。中でも、花弁が広く、外は深

黄色、内は紫色と美しいトウ(唐)ロウバイ(漢名、檀香油梅、花全体が黄色で香りのよいソシン(素心)ロウバイなどよくみかけられるものです。

漢名の蠟梅、臘梅を音読みにして、ロウバイとしたものですが、あるときの句会で、両方の漢字での出句があり議論になりました。『歳時記』を繰ると、主題に臘梅、副題に蠟(蠟)梅、唐梅、南京梅などあり、どちらも使われるようです。

蠟細工のような半透明の花が大きき、形状、香りが梅に似ているということ、で臘梅。又、臘月(旧曆十二月の異称)に開花するので臘梅と名付けられたようです。

生薬名は蠟梅。開花前のつぼみを探り、乾燥して用います。長期の咳に煎じて服用。又、ごま油に漬けておき、火傷にこの油を塗布します。

中国では「雪中の四花」に梅、水仙、椿と共に、「瑞祥植物の四花」には梅、菊、水仙と共に愛でられ、古来よりロウバイはとても目出度い花として賞美されていました。

参考文献

「四季の花事典」

八坂書房

「原色牧野植物大図鑑」

北隆館

「図説花と樹の大事典」

柏書房

著者略歴

神戸薬科大学卒

ロウバイ (カラウメ) [ロウバイ属] (ろうばい科)

Chimonanthus praecox (L.) Link
(*Meratia praecox* (L.) Rehd. et Wils.)
(臘梅)

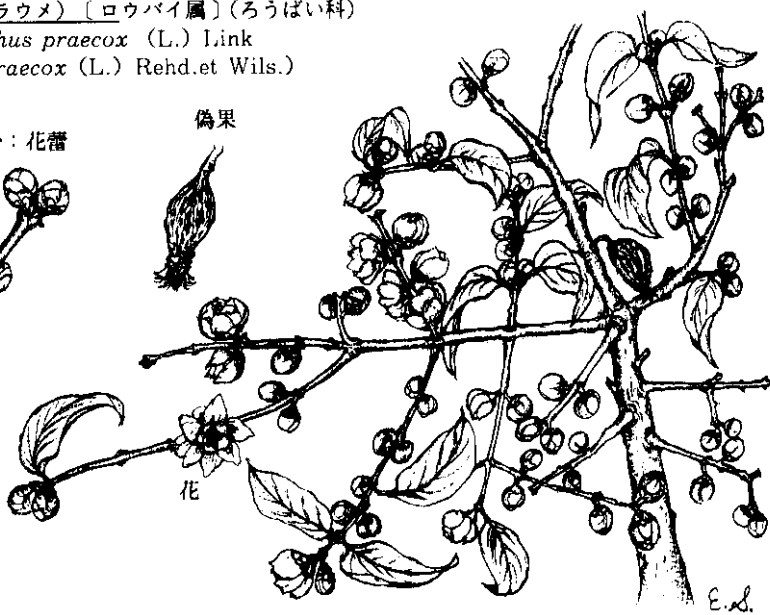
薬用部分：花蕾



偽果



花



須賀悦子画

臘梅の花にある日のあるとのみ

長谷川素逝

臘梅のかをりやひとの家につかれ

橋本多佳子

臘梅の咲きうつむくを勢ひとす

皆吉 爽雨

臘梅の咲くゆゑ淡海いくたびも

森 澄雄

臘梅や樅をはなるる風の音

古館 曹人

風往き来して臘梅のつやを消す

長谷川双魚

臘梅を透けし日射しの行方なし

後藤比奈夫

臘梅の散らむにはなほ竹さやぎ

岸田 稚魚

ほとけ恋ひみて臘梅の一二りん

鷺谷七菜子

地震の日の臘梅今も香りたり

鈴木 愛子

くろつけ

鈴の奏

品川鈴子選

黄落のシカゴ大学バス走る 兵庫 秋田 直己

白川女時代祭の殿に

柿を剥く吾は肥後の守妻包丁

肩書を忘れ呑む酒十三夜

眸あをき尼僧喜捨乞ふ秋の街 東京 遠藤とも子

霧晴れて堅琴に似し橋浮かぶ

菊むしる無残ともまた豪奢とも

菊むしる昔みちのく膳部の間

天金の剥がれし詩集霜夜更く 兵庫 栗田 武三

霜の夜に煌たり自動販売機

墓のこともうち出すな霜夜更く

花売りに更けゆく霜夜アヴェマリア

日射し受け長々と剥ぐ柿の皮 愛媛 武智 恭子

びつしりと上下の服に草じらみ

しめ縄の新藁届く社殿前

峠道白き野菊の群がりて

船だまり売り舟もあり秋時雨 兵庫 大西 和子

秋簾いごつそ竜馬の隠れ宿

利酒のほろ酔罷る蔵通り

付城の発掘続く里の秋

村芝居客と掛け合ふ月の下 徳島 河井富美子

散り敷きし山茶花通り抜けるまで

稲雀網打てばごん兵衛となる

蜜蜂の身を寄せあひて冬ごもり

別のこと思ふ二人の冬灯 兵庫 安藤 浄子

柿紅葉「こども110番」の家

壊されし木造住宅ピラカンサ

大根畑高層マンション建ちあがる

西鶴忌付句の浮かびては消ゆる 大阪 北川 光子

手に触れて失う零余子行者道

山里に古鍋叩き鳥威す

山荘の迷路に拾う銀杏の実

蓮の実をぐりんぐりと葉が誘う 京都 中崎 敏子

菊花展柵をのら猫闊歩する

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句 十五句 池田かよ //

* 選句は全て 品川鈴子

黄落のシカゴ大学バス走る

秋田 直己

墓のことももち出ずな霜夜更く

栗田 武三

アメリカはイリノイ州東北部、ミシガン湖の南岸近く、シカゴ川の河口の都市シカゴは世界最大の穀物と家畜市場一八九〇年創立のシカゴ大学を中心に、シカゴ学派と呼ぶ実証的な社会学や経済学で栄えた伝統があつて、さぞ広大なキャンパスなのであろう。

構内をバスが走り黄落の折りなどは一際美しい展望。国際的な視野を持つ作者ならではの句。

菊むしる昔みちのく膳部の間

遠藤とも子

日射し受け長々と剥ぐ柿の皮

武智 恭子

東北地方の薄暗い部屋で、調理を扱う人物は今昔物語にも登場するが、食用菊を今もひたすらむしっている情景。黄色の花弁が躊躇わず筆り取られ、見る間に散らばるのは、華やかともあわれとも感じられる仕事場。

この頃はひと続きに皮の剥ける人は少なく達人である。日当たりの良い縁で干柿づくりに励まれている。飴色の生乾きの味は最高。皮も干して沢庵漬けなどに利用される。

秋簾いごつそ竜馬の隠れ宿

大西 和子

大政奉還に尽力した幕末の志士坂本竜馬は土佐の人。音にきこえた伏見の旅籠寺田屋を詠まれたもの。いごつそとは土佐の方言で、気骨ある、信念をまげぬとの意で、「いごつそ竜馬」とは言い当てて妙。

散り敷きし山茶花通り抜けるまで

河井富美子

冬咲く花の代表、園芸種のものには色数も多く、庭や垣根などに植えられることが多い。散りつぐ花びらは地面をかくす程。山茶花通りと親しまれ、憩いの場でもある。

別のこと思ふ二人の冬灯

安藤 浄子

寒げな冬の灯のもと、お互に違うことを思い巡らしている。逆らうとすぐさま落ちる雷がこの頃落ちなくなつた。聞き流して生返事ばかりの自分にも非がある。季語の冬灯が効いていて、春灯、秋灯とは自ずと違う。

西鶴忌付句の浮かびては消ゆる

北川 光子

井原西鶴、矢数俳諧（独吟で句数を競う）で一昼夜に二万三千五百句作つたと云われる才人。連句は読んでも巻いても楽しい。次々句は生まれるがこれで決定とはならず、ちよつとでも西鶴さんにあやかりたいものと思う。

菊花展柵をのら猫闊歩する

中崎 敏子

名人上手から素人の愛好者まで一年間丹精こめて咲かせた菊を出品、金銀の賞を付けられ展示される。晴れの場の囲いの柵をのら猫は猫の勝手でしょと云わんばかりに歩く。大事な菊に障らぬかとはらはらせられる。

暁雲を千切つてしまへ啼り鴉

松本 恒司

秋の澄んだ大気をふるわせてけたたましく鳴く。性質が荒く、雀その他小鳥たちは鳴りをひそめてしまふ。暁の雲を切り取つてしまふ程鋭く裂くような声で。すかつと力強く、やはり殿方の句である。（以下略）